小石川御家人物語

氏家幹人

朝日新聞社

小石川御家人物語

氏家幹人

朝日新聞社

氏家幹人（うじいえみきと）
一九五四年福島県に生まれる
一九七七年東京教育大学文学部卒
一九八二年筑波大学大学院博士課程中退
現在　国立公文書館勤務
著書　『江戸藩邸物語』（中公新書）
『殿様と鼠小僧』（同）
『江戸の少年』（平凡社）

小石川御家人物語（こいしかわごけにんものがたり）

一九九三年五月一日　第一刷発行
一九九三年七月二十日　第二刷発行

著者　氏家幹人
発行者　天羽直之
印刷所　凸版印刷
発行所　朝日新聞社

〒104－11　東京都中央区築地五－三－二
編集・書籍第一編集室　販売・出版販売部
電話　〇三－三五四五－〇一三一（代表）
振替　東京〇－一七三〇
定価はカバーに表示してあります

©M. Ujiie 1993
ISBN4-02-256614-0
Printed in Japan

目次

発端 7
第一夜 結婚の条件 15
第二夜 優しい離婚 33
第三夜 女たちの就職 51
第四夜 大いなる出勤 71
第五夜 叔父さんは受験生 91
第六夜 大きな江戸の小さな屋敷 109
第七夜 耕やす人々 127
第八夜 転勤 149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第九夜　武士ってなに　167
第十夜　檻の中　189
第十一夜　病気の話　207
第十二夜　幕臣たちの生活倶楽部　231
第十三夜　婢女　251
第十四夜　おばあさんは忙しい　271
第十五夜　老いの愉しみ　287
後記　308
関係者家系図

装画
挿画　蓬田やすひろ

A・D　熊谷博人

小石川御家人物語

身のうへの昔を
時勢(いまよう)に語り給へ
（『好色一代女』より）

発端

この「物語」に関わることになったそもそものきっかけはといえば、一昨年の正月休み明け、フリーの編集者の友人と、歌舞伎町コマ劇場裏の海鮮料理店で待ち合わせたことだった。

あの時、古書古文書の世界に頭まで漬った生活にいい加減うんざりしていた僕は、正月を南の島で過ごしてきたという彼が、ひたすら眩しくてならなかった。

おのずから気も口も重くなろうというもの。

「それはたしかに、生活の機微が肌で感じ取れるような歴史ノンフィクションというのは素敵だと思うけど……」

さながら出来の良いホームドラマかなにかを見せるように、江戸の武士の生活を描き出せないか（しかも確実な史料的裏付けの上に）という彼の注文に、僕はますます気が滅入ってしまう。

「ちょっと無理じゃない」

「いや、それはそうかもしれないけど」

そういって言葉を途切らせた彼は、皺くちゃになったメモを手帳から取り出してから、それを読み上げた。

「どれも岡本綺堂の『半七捕物帳』から抜き出してきたんだけど、たとえばさ、〈武士は常に重い大小をさしているので、自然の結果として左の足が比較的に発達している、足首も右より大きい〉とか、〈以前は少し大きい溝川のようなところにはきっと河獺が棲んでいたもので、現に愛宕下の桜川、あんなところにも巣を作っていて、ときどきに人を嚇かしたりしたもんです。河童がどうのこうのというのは大抵この河獺の奴のいたずらですよ〉とか。なんていうのかなあ、すごく臨場感があって、しかも鋭いと思わない？」

要するに、一見なんでもない些細な事だけど、同時代人（あるいはその時代の日常生活に精通した歴史研究者）しか知りえないような、そんな内容をちりばめて現代人に語りかける本を作ろうよ、というのが彼の企画らしい。やっぱり無理だ。少なくとも僕には。

「『半七』にはもっと面白いのもあるんだ。武士の子供たちの話で、個人的にはこんなのが一番好きなんだけどさ、ええと、〈大身の子と小身の子とはとかくに折り合いが悪い。大身の子は御目見以下の以下をもじって『烏賊』と罵ると、小身の方では負けずに『章魚』と云いかえす。この烏賊と章魚の争いが年々絶えない〉だってさ」

へええ、そんなに岡本綺堂がいいの。少しムッとした僕は、

「だって綺堂は明治の初めの生まれだろ、それに父親は幕府の御家人だったっていうし。そりゃあ幕末の江戸については同時代人の眼は持っていたろうさ。でもね、綺堂って、江戸時代でもちょっと前のことになると、ほとんど無知に近いんだぜ」

と過激に言いなぐったうえで、綺堂が寛延元年（一七四八）の事件を扱った話に八州廻り——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

関東取締出役。その設置は文化二年（一八〇五）なのだ――の目明しを登場させている例を挙げ、思わず鼻の穴を膨らませた。

ところが、いつもなら「仕方ないね、もういいよ」と引退がるはずの彼が、この日は違った。

「きっとそういうと思った。いつもながら厳しい評だね。いや、たしかに君は職業的な物書きではないから、断片的であやふやな史実を膨らませて物語をこね上げることはできないんだろうね。なんやかや言っても、やっぱり学者なんだよね。じゃあさ、誰かの昔語りを聞書きして、それに補注や解説をつけるっていうのはどう？」

聞書き、ときた。一体そんな古老がどこに存在するっていうのだろう。かりに明治十年生まれの老人（それくらいなら幼少時に聞いた江戸の話をつなぎ合わせて、なんとか昔語りができるかもしれない）だとしても、今年で百十三、四歳のはず。世の中には百歳を超えてもシャンとした人がいないではないけど、仮にも一冊の本に仕上がるだけの量と内容を語り出すとなると、話は全く別だと思う。だいいち、その百十何歳かの古老と共にどれくらいの時間を過ごせば、それなりの成果が期待できるというのだ。

「実はさ、相手のお婆さん、つまり語り手とはね、もう話がついているんだ。憶えているよね、以前にこの店で働いていた熊埜御堂静さん、彼女のアパートの隣りに、江戸時代生まれでとても達者なお婆さんが独りで住んでいるんだって」

熊埜御堂静、クマノミドウシズカ。忘れるものか、まるで『義経記』の世界から抜け出してきたような床しい名前で、しかも若くて翳のある美貌の持ち主となれば。

あれは四年前の夏の晩、僕らのテーブルに蠔油鮮干貝（ホタテ貝のカキ油煮）の皿を運んできた彼女の胸の名札に先ず目をとめたのは僕。でも、「ねえ、それなんて読むの」と話しかけたのは彼のほうだった。

どうやらそれがきっかけで、宮崎は高千穂の出身だという彼女と、彼は、少なくとも連絡を取り合う程度の仲になっているらしい。妻子持ちの僕と違い、彼は厄年を過ぎたとはいえとにかく独身だし、人づきあいも概してマメ、若い異性（といっても概ね二十代後半以上らしいが）から〝人生の相談〟を持ち込まれることも多いという。

仕方ないさ。自ら好んで選んだ途とはいえ、江戸時代の日記や文書とばかり濃密な関係を結び続けている僕の「男」は、もうそれ自体カビ臭いものとなっているのかもしれない。

それにしても、ゲンキなおバアさんだって？

「いったい何歳なの、そのお婆さん」

「ええとね（再びメモをながめてから）、エンキョウ元年っていうから、ええと、二百五十歳くらいかな」

「二百五十歳くらい！　もちろんご愛敬だよね、それ。それとも平成女性版蘆原将軍かな。いや、たしかに文政十二年当時、六百七十二歳の農夫が奥州白石の近在にいたという記事をなにかの随筆で見た記憶がある。それに正徳五年の尚歯会、尚歯会というのは今でいうなら長寿者の集会とか敬老会ってところだけど、その尚歯会の最高齢者は志賀瑞翁という人で、百六十七歳だったというよ。ほかにも二百十五歳と百九十三歳の老夫婦の話とか。もっと凄

いんでは、これはたしか宝暦年間の山城国の話だったかなあ、夫が百八十四で妻が百八十六、そして息子が百六十四だったんだって。すさまじいだろう。もちろん全くのウソか、せいぜいのところとんでもない誇張だと思うけどね」

手元になんの資料もメモもなく、これだけの事例と数字が口からほとばしり出てくるとは、われながらなんという博覧強記だろう。嬉しさがこみ上げて、さらにダメを押そうとでも思ったのか、

「馬琴も『玄同放言』の中で、二百歳以上の長寿者も博捜すればいないことはないといって、いろいろ文献を引用しているけどさ、まあ今の日本、この東京の空の下に二百五十歳の老女が元気に暮らしている可能性なんて、皆無だと思うよ。それに、中国の『五雑俎』の中に書いてあるそうだけど、百二十年以上生きているのを〝失帰の妖〟というんだって。ぶっちゃけていえば、もはや妖怪に近いってことかな。それはともかくとして、だいいち本当に二百歳以上なら、少なくとも半世紀以上前から世間で騒がれているはずだよ」

「それは僕もそう思うけど。ところがさ、彼女、彼女って静さんのことね、彼女の話がなにしろ面白いんだ。そのお婆さん、なんと昼間は国会図書館や都立の中央図書館、それと何んだっけ戸越にある、そうそう国文学研究資料館、そういう所に出かけていって史料を筆写したり文献や論文をコピーしているっていうんだ。だから江戸時代の歴史にすごく詳しいんだってさ。ね、ウソでも騙(かた)りでも蘆原将軍でもいいじゃない、とにかく会ってみない？　きっといい話し相手になるよ」

かくして一月七日、人日の夜に、僕と彼は小田急の経堂駅で落ち合うことになった。駅を出てすずらん通りを小学校の方向にすすみ、鶏肉専門店の所を右に折れ、ほんの十メートルも坂を下った右手にある老女の住まい、二階建て鉄骨構造のアパートの一室を訪れたのである。

*

それから先、どのような段取りで彼女の昔語りがこの「物語」に仕上がっていったのかについては、彼女の容貌や語り口の印象も含めて、すべて割愛せざるをえない。紙幅の関係で、というよりも、その一つ一つが新鮮で刺激的だっただけに、なにを述べなにを省略するべきか選択が困難だからだ。

とにかく、僕と彼と熊埜御堂静さん、それとどうやら語り手自身が声をかけて集まったらしい小百合会（いまだに正体がよく分からない会。なにしろ古文書や古記録を読む会らしい）の御婦人方、合わせて十三〜十五名の聴衆が組織されたのである。

言い遅れたが、老女の名前は小野銀子（もっともこれは今風に改めた名で、もともとは小野ギンだったらしい）。小野お通でなかったのがちょっと残念だったが、事実はさほどあからさまに虚構めいてはいなかった。

「私は今年で二百四十八歳。いいえ、もちろん数え年です。俳人宰鳥が蕪村と号を変えた延享元年に、小石川で生まれました」とおっしゃる銀子さん。彼女の話を聴く会は、一月十一日の晩を初回に、毎週金曜日の午後七時半から毎回二時間ほどの予定で開かれることになった。場所は小

百合会のメンバーで、みるからに富裕そうな御婦人が邸宅の一室を提供してくれたので、はなはだ快適。話の合間には香りのいい珈琲や和洋とりどりの珍菓も供されて……。

いや、そんなことはどうでもいい。くだくだしい話はこのへんで切りあげて、さっそく「物語」の世界に入っていくことにしよう。ただ、その前に一点だけ断っておかなくてはならない事がある。それは当初の計画と違って、補注の部分も銀子さんが担当することになった理由。別に僕が渋ったためではない。精力的でしかも大変な勉強家の彼女が、われわれの前に分厚い史料・文献ファイルを持ち出してきて、補注もぜひ自分に書かせてくれと申し出たのである。

なんという幸いだろう。お蔭で僕は、少なくとも会の開催中はあらゆる仕事から解放されて、彼女の、ところどころ分かりにくかったり疑わしい点もあるけど、なお十分に興味深い昔語りに聴き浸ることができたのである。十五夜にもわたって。しかもいつも静さんの隣りの席で。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com